

水稻の作柄に関する委員会（平成21年産第3回）議事要旨

1 開催日時：平成21年10月1日（木） 13:00～15:00

2 開催場所：農林水産省統計部第1会議室

3 出席者：【委員・専門委員】

染英昭座長、秋田重誠委員、黒田栄喜委員、長谷川利拡委員、
丸山幸夫委員、山岸順子委員、渡辺典昭委員
佐々木悠専門委員代理、鈴木章宏専門委員代理、
村上豪専門委員代理

【事務局】

大臣官房統計部長、生産流通消費統計課長、他

4 議事

平成21年産水稻の9月15日現在における作柄概況調査結果及び次期調査に当たって留意すべき事項について

5 議事概要（○：委員からの発言 →：事務局等からの発言）

事務局から平成21年産水稻の9月15日現在における作柄概況調査結果について説明後、各委員から意見・提言を受けた。

- 品質的な問題がそれほどなくても、ふるい下米が増えているのではないか。これにより農家の収量実感が平年を下回ったものとなる可能性がある。
- 本年は刈り取りの遅れがみられ、また穂数が少なく登熟が良い傾向であることから、倒伏面積拡大の可能性がある、収量への影響が懸念される。
- 北海道において耐冷性品種の改良が進んでいるといわれるが、例えば平成15年の冷害時と比べて新しい品種の導入効果がどの程度あったのかという点についても検討しておく必要がある。
- 本年は生育期の気温は平年並みで日照が少ないという特徴となっており、生育期のこうした気象経過が作柄に対してどの程度影響を与えたのかという分析が本年の総括になるのではないか。
- もみ数が少なくなっているのに加え、出穂前の蓄積養分が平年より少なくなっていると考えられ、このことが収量に影響するのではないか。

これらを踏まえ、さらに以下の意見・質問等があった。

- 北海道で冷害に比較的強いとされている「ななつぼし」と従来の「きらら397」等を比較した場合に、障害型不稔の出方が違う等の情報は把握しているか。
→ 現時点で品種別の刈り取り結果の分析までは至っていない。これらの結果が揃った後に、平年収量等を検討していくまでの段階で整理していきたいと考えている。
- 冷却量と不稔発生モデルについて分析中であり、今の段階でははっきりとは言えないものの、冷却量だけをみると本年は平成5年や15年と比べるとそれほど厳しくないのではないかとみている。
- 春先の低温を伴う日照不足の影響について、もみ殻の大きさや乳白米・心白米等の品質への懸念が指摘されているが、このあたりはどのように考えられるのか。
→ 乳白等については心配していないものの、品質についてはウンカの影響が気になる。また、もみ殻の大きさについては、日照不足の影響で「伸びしろ」があまり残っていない可能性があり、農家の収量実感と収量基準の1.70mmによる差が大きくなることが考えられる。

上記質問・意見を踏まえ、委員会としての意見をまとめ、その場で了承された。
(<http://www.maff.go.jp/j/press/tokei/seiryu/091002.html>)

(参考)

○会議及び議事録を非公開とする理由

今回開催した水稻の作柄に関する委員会については、当年産の水稻の作柄に関して、学識経験者等から専門的な見地から意見を聴くために開催している。その内容は、個人・地域における水稻の品質、収量等に関する事項等、特定の個人若しくは団体に不当な利益若しくは不利益をもたらす恐れがある事項が含まれること等から、会議及び議事録を非公開としている。